

時、何とフランス女性は粹で、余裕があり、大人だなあ、とひどく感激し、その日は、実に30キロ近く歩いていたので、感激もそこそこに眠りが僕を支配し、気がついた時には、朝だったのであります。いやいや下らない、とりとめもない話を長々してしまいました。後の質問は」

Q「ベネディクタの話はよく分かりました。その他に印象的に残る人は」

A「イタリア人のピッカリオの事ですかね」

Q「彼は一人で歩いていましたが、実に社交的な男でどんな人種の集団にも顔を出していました。もちろんイタリア人は周りに一人もいなかったせいもありますが。仕事の関係で日本の東京にも住んでいたことがあるみたいで、彼の方から僕には話しかけてきました。怪しげな英語やスペイン語を饒舌に喋りながら、誰にでも話していく姿勢がイタリア的な気がします。彼のことをよく覚えているのは、細かい話は忘れていましたが、歴史、文化、哲学について教養があるという印象があります。たとえば長々と人間の愛には、アガペーとエロスとフィリアの三つがあるとか、巡礼という行為の哲学的な意味について議論を展開していたことを記憶しています。一番彼の言ったことでよく覚えているのは、「自分は今は神を信じていないが、クリスチャンとして生まれ、クリスチャンとして死んで行くだろう」という言葉でした。その時に「僕も同じだよ。仏教徒として生まれたので、やがて仏教徒として死んでゆくだろう」と答えたことを。ピアフランカ・デ・ビエルゴという古い街の広場でのことです。イタリア人は、フランス人より社交性があり、スペイン人より知性的で哲学的。両民族を足して二で割ったような性格がイタリア人といえそうです。両民族ほど自民族中心的ではなくて、国際的か？イタリア人には、旅行中あちこちでよく会うのですね。スペイン以上に愛想がいい。結構英語を喋る。フランス人は最初からは英語を話さないが、イタリア人はいきなり英語で喋りかける。スペイン人は英語も、フランス語も、イタリア語も喋れない。極端な表現をすると、彼らの世界に外国や外国語があるという認識が無い、世界のみんながスペイン語を理解しているものと思っている。同じ自民族中心主義でも、フランス人はスペイン人と比較

すると国際的である。彼らの英語嫌いは、歴史的に見て恐らくイギリスとの長い戦争の産物なのでしょうね。海は隔てて隣国だし。」

Q「巡礼後の生活に変化はありましたか？」

A「帰ってきてから一週間も経たない間にアメリカに旅立ったものですから、巡礼のアフター・エフェクトについては、まとまった考えはありません。でも、前から再三に渡って引用している、パウロ・コエーリョ著「星の巡礼」の本の中身の理解が、帰ってから読み返してみると、なるほどという箇所が何ヶ所もあるのですね。巡礼に行く前に事前勉強も兼ねて読んではいたのですが、その時には何も感じなかった箇所が、後で読み返してみても妙に心に残るのですね。感情的なレベルで理解できた、実感として分かるようになりました。特に巡礼行動の効能は、重い荷物を背負い、歩くという肉体的な苦痛を自らに課しながら、精神内部の葛藤を昇華しようとする試みじゃないかと、以下のような、彼の言葉から勝手に解釈しました。

「自分で自分を責めさいなんているのに気づくためには、精神的な苦痛を起す試み、たとえば、罪悪感、後悔、優柔不断、臆病などを肉体的な苦痛に変換する必要がある。精神的な苦痛を肉体的なものに変えることによって、われわれはそれがどんなにわれわれに害をおよぼしているのかを悟ることができる。」(コエーリョ, 1987 pp. 71-72)

#### IV 巡礼行動の次元と分類

従来の巡礼行動は、往復運動型と円運動型の二つに分類されてきた(山折, 1991)。前者は出発点と目的地との間の往復運動としての聖地巡礼であり、一神教の世界によくみられる。後者は、複数の多元的な聖地へ巡り廻る円運動が重要な特徴をなし、仏教などの多神教の世界に多い。世界的に見ると、キリスト教やイスラム教の聖地巡礼は往復運動型であり、インドでは円運動型である。しかし、日本の中でも、前者は伊勢参りや熊野詣のような往復運動と四国八十八ヶ所遍路や西国三十三ヶ所巡礼のような円運動型が共存している。こうした形態による分類以外に、巡礼行動を分類する次元は果たして存在するのだろうか。